

露地ネット型メロンの品種と整枝法について

畠山順三・藤本順治・田村保男・加賀屋博行

(秋田県農業試験場)

On the Varieties and Their Training Methods of Nettype Melon in Field

Junzo HATAKEYAMA, Junji FUJIMOTO, Yasuo TAMURA, and Hiroyuki KAGAYA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 ま え が き

本県で栽培されている露地メロンの品種はプリンスが主体である。プリンスは8月出荷では日持ちが劣り、品質低下となって早出しが有利なことから作型は次第に早まり、7月下旬には収穫が終る。一方、需要は8月にも高く、より品質の良いメロンの要求が高くなってきている。

このようなことから、品薄となっている8月出荷をねらいに、ネット型メロンの優良な品種の選定とその栽培法(整枝法)について予備試験を含め昭和50、51年の2カ年試験を行なった。その結果“真珠”が普及性のある有望な品種であることが認められたので報告する。

2 試 験 方 法

供試品種は図1に示すように“ナポレオンPMR2”ほか9品種である。

整枝方法は1株つる2本仕立て(畦幅230cm, 株間60cm)とつる3本仕立て(畦幅230cm, 株間90cm)の2方法とした。着果数はそれぞれ4個, 6個を目標とした。着果節位は14節前後とし、12以下の側枝はすべて除去、着果節位上の側枝は2葉を残し摘心、主枝は25葉で心止めした。

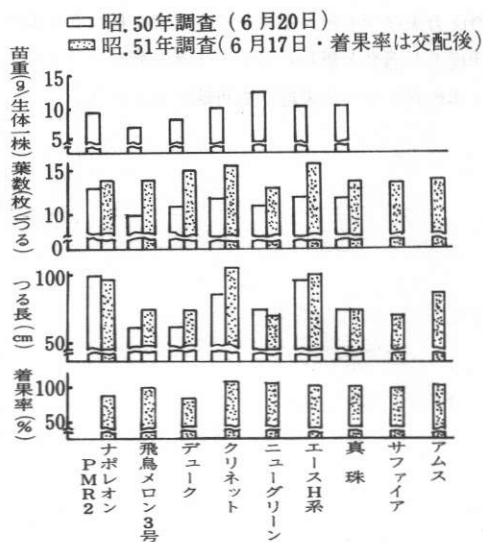


図1 初期生育と着果性

定植は5月26日(昭・50), 5月7日(昭・51), 兩年ともトンネル・白マルチ栽培とし、施肥量はアール当たり N, P₂O₅, K₂O 各 1.3 kg, 2.1 kg, 1.1 kg を施用した。

3 試 験 結 果

生育をみると(図1), 苗重が重い品種ほど定植後の初期生育がまざる傾向があった。“真珠”は苗重が比較的重く充実した苗質を示し、定植後の初期生育でも葉数の分化が多く節間の短い充実した生育を示した。

着果性は各品種とも概してよく、“真珠”も高い着果性を示した。

つぎに果実の肥大をみると(図2), “クリネット”“ナポレオンPMR2”“飛鳥メロン3号”“真珠”が果実肥大がよく大果であった。整枝方法では、昭和50年の結果ではつる3本仕立てで大果が得られているが、昭和51年の結果ではつる2本仕立て区の方がつる3本仕立て区より各品種とも果肥大がまざる傾向にあった。整枝方法や年次間で肥大に大差がなく玉伸びのよい品種は“真珠”“クリネット”であった。

果実糖度をみると(図2), 概してつる3本仕立て区のほうがまざる傾向にあったが、品種間差がより大きく、

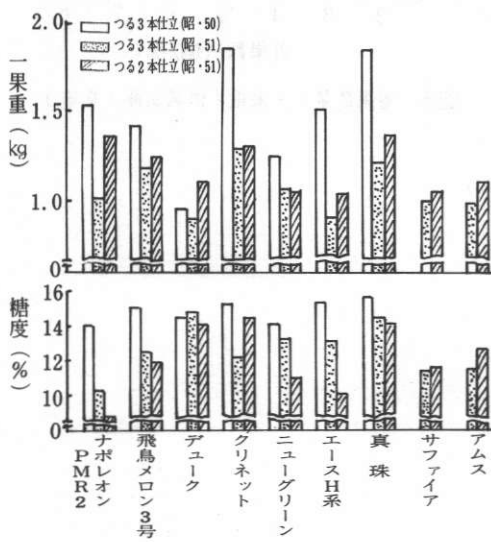


図2 果重と糖度(屈折糖度計示度)

“デューク”“真珠”が糖度の高い品種であった。この2品種は、整枝方法や年次間による糖度の差が少なく、高温期であっても14度以上の糖度を示し最も安定して甘味のある品種であった。

つぎに果実の外観、肉質についてみると(表1)、生育がよく、果実の肥大、糖度が比較的高かった“クリネット”はネットの発現がやや劣るほか、果皮色が黄化し、また果

肉が軟らかく日持ちも劣った。果実肥大がよい“ナポレオンPMR2”“飛鳥メロン3号”はネットは比較的よいが、果肉が軟らかく日持ちが劣った。これらの品種に比較して、“真珠”はネットの密度はやや細いが盛上りが大きく、また太かった。果形の揃いもよく、日持ちも1週間程度あり品質が最もよかった。

つぎに“真珠”について株当り着果数と果実肥大との関

表1 果実の外観と肉質

供試品種	果形良否	果の揃い	ネ ッ ト		果皮色	果肉色	果肉硬度	日持ち
			密 度	盛 上 り				
ナポレオンPMR2	良	良	やゝ密	強	灰白緑→黄緑	淡黄緑	やゝ軟	やゝ不良
飛 鳥	並	並	並	強	灰青緑→黄緑	白 緑	軟	並
デ ュ ー ク	並	並	やゝ粗	並	灰黄緑→黄緑	淡 緑	軟	やゝ不良
ク リ ネ ッ ト	良	良	並	やゝ弱	灰白緑→黄緑	淡 緑	軟	やゝ不良
ニューグリーン2号	良	良	密	やゝ強	灰 濃 緑	淡 緑	硬	良
エ ー ス 日 系	並	良	並	並	灰白緑→灰黄緑	淡 緑	軟	やゝ不良
真 珠	並	良	密	極強	灰 白 緑	淡 緑	硬	良
サ フ ェ イ ア	やや良	良	並	強	灰 濃 緑	淡 緑	硬	良
ア ム ス	並	良	密～粗	弱	濃 緑 → 淡 緑	淡 緑	やゝ軟	並

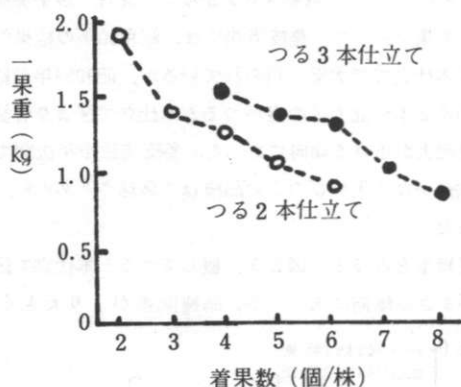


図3 着果数量と1果重(供試品種:真珠)

係をみると(図3)、両つる仕立て区とも着果数の増加に伴って一果重は小さくなった。最も商品性の高いと思われる適当な果重を示しているのは、つる2本仕立てでは1株当たり3～4個、つる3本仕立てでは5～6個の着果量であった。

4 ま と め

8月出荷をねらいとしたネット型メロンは“真珠”が果実外観、肉質、日持ちにすぐれ、病害に強く生育が旺盛で栽培しやすく、最も普及性のある品種であるとみられた。

整枝方法は果実肥大をはかるうえで1株つる2本仕立て4果獲りが適当と思われるが、土壌の肥沃なところではつる3本仕立て5～6果獲りも可能と思われた。